

## ぼくの草取り体験

九月の「学校を美しくする日」のことだ。ぼくたち五年生の分担任は、うら庭の垣根のそばの草とりだった。

夏休みの間に草がのびほうだいになっていた。本当は、あまり気の進まない仕事だけれど、ぼくたちが低学年のときには、高学年の人たちにもしてもらっていたことだ。やらないわけには、いかない。ぼくたちは、話し合っ、まず全員でぬいた草をまとめておいて、あとからそれをビニールぶくろにつめることにした。

みんないきおいこんで、競争のように草取りにかかった。でも、暑い夏の日が続いて地面がかたくなっているので、なかなか根っこまでぬけない。特に、オオバコやカヤツリグサなどは、根が深くて大変だ。ぼくは、めんどろになって草の上のほうだけを、ぶちぶちと引きちぎっていった。

ふと、となりを見ると、洋君は、短い草も根っこを残さずにいぬいにぬいている。ぼくのぬいたところと比べてみると、ずいぶんきれいになっている。ぼくは、思わず回りを見た。みんなも、かたい根のところは、そのままにして上の草だけをちぎっている。

(洋君は、なんでもていぬいにする性格だから、根っこからぬいているけど、あんなにきれいにしあって、どうせすぐに草はのびるのになあ。)  
ぼくは、心の中でそう思っていた。

次の日曜日は、町内清掃の日で、公園の草取りをすることになっていた。家から、だれか一人が参加すればよいということだった。たいていの家では、おとなの人が出ている。ところが、ぼくの家では、しんせきの家に急用ができて、父も母も出かけることになった。

「とおるは、よくあの公園で遊んでいるから、行ってくれるね。」  
おとなの人ばかりが集まっているところは、てれくさいし、行きたくなかったけれど、そう言われて、しぶしぶ行くことにした。

公園に着くと、となりのおばさんに、  
「おかあさんの代わりに来てくれたの。えらいわね。」  
と、声をかけられ、はずかしくなった。うつむいたまま、学校のとくと同じように、どんどん草をひきちぎっていった。

顔をあげると、洋君が来ていた。洋君は、やっぱりいいねいに草をぬいでいる。

「洋君、きみの家はお母さんが来ているのに、どうしてきみまで……。」

と、聞くと、洋君は、照れたようにほほえみながら言った。

「ぼくは、この公園でよく遊ぶし、おとなの人たちも、みんなが気持ちよく遊べるようにと、草を取ってくれているんだもの。」

ぼくは、楽しそうに話をしながら、草取りをしている回りのおとなの人たちを見た。いやいややっていた自分

は、何だったんだろうと、後ろめたかった。

洋君とやらんで、さっきよりもいいねいに草を取り始めた。

次の日、学校からの帰り道に公園の横を通りかかった。

公園がすっきりして広く見える。一年生くらいの子どもたちが、元気にボール

遊びをしていた。

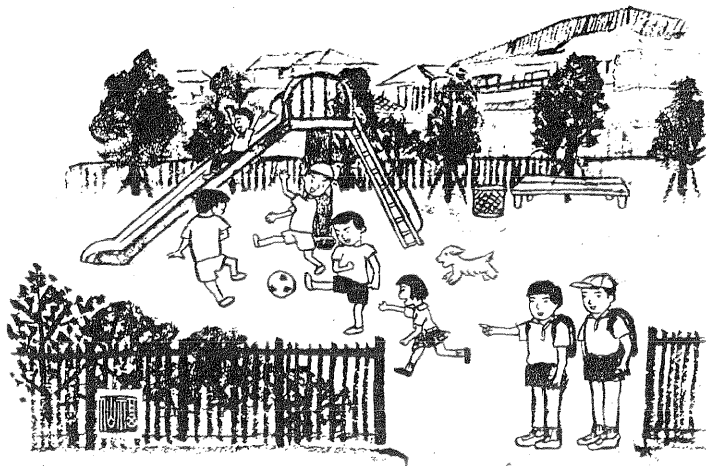
草取りをしたために、公園全体を使って遊ぶことができるようになっていた。小さい子どもたちの笑い声が明るくひびいてきて、ぼくはうれしくなった。

洋君がいつものまにか、ぼくに追いついてきた。ぼくたちは、顔を見合わせた。子どもたちの遊んでいるようすを見ながら、きのうの草取りのことを思い出してにっこりした。

「ぼくたちも、公園でみんなといっしょに遊ぶよ。」

「そうだね。みんなをさそってくるよ。」

ぼくたちは、かばんを置きに家に向かってかけだした。



(坂部 俊次)